研究雑話（4）

# 「構造と機能、まずは胸を張って歩ける力」（E・セガン）

## 手は突き出た大脳・セガン教育の原理（二）

藤井　力夫

「止まれる子どもは発達する」。前回は、その子どもなりに何だろうと立ち止まって、自分の手でいろいろと調べてほしい、その子どもなりの立ち止まり方を大事にしていきたい、とするE・セガンの考えをお話しました。では、どうすればそのような子どもになるのか。今回は、「胸を張って歩ける力」、まずはこれを形成することだとするセガン教育の原理（二）についてお話したいと思います。これは、構造と機能の問題で、その子どもなりに立ち止まって、手が突き出た大脳として使えるようになるためには、身体のレベルで構造がしっかりしていることだ。構造のしっかりした子どもは胸を張って歩ける。外界に対して何だろうと立ち止まり、さまざまに手を使うことができる。それゆえ、身体づくりは胸を張って歩ける力を育てることが目標だというわけです。なんと具体的で核心をついた言葉でしょう。一八四一年ですから、我々としてはたいへんな衝撃であります。E・セガンの発達診断。身体も構造のレベルでなされます。ほとんどの障害児が構造のレベルで問題があり、胸が落ち込んでいると。

ジャックマン　十七歳

【知能】　話せず、典型的白痴。

【身体】　胸は落ち込み、猫背で膝は曲がっている。前頭部、側頭部が凹み、顎は出ている。目は定まらず、手は使用に耐えない。

【性格】　強情で臆病。

【習慣】　終日うずくまっている。身体を引きずるように歩く。手はいつも拾った陶磁器片等を持っている。

典型的な「白痴」です。セガンは胸が落ち込み、顎が出ているところに諸悪の根源があるとするのであった。これが構音器官の発達を遅らせ、お話しできるようになかなかならない。しっかり自分なりに立ち止まり、何だろうと見比べ、手で確かめるといった方向を切り開くことにならない。だから発達できないというわけです。

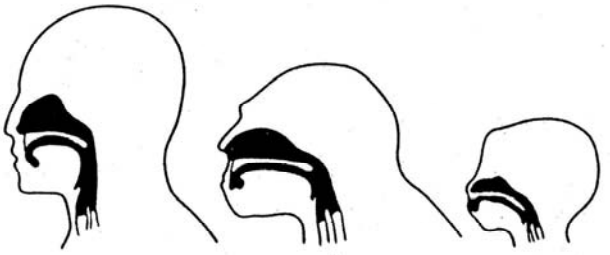
なんと的を得た指摘でしょう。身体とは胸を張って歩く力。知能とは話す力。習慣は生活そのもの。性格は二面をまるごと認める。どんな子どもか、生活が見える発達診断と言ったら良いでしょうか。これもすべて身体の構造のレベルでの把握がしっかりしているからです。図示したように胸を張ることの効用は、①呼吸が深くなり、②構音が複雑になり、③前頭葉が大きくなることと関わってきました。樹上生活を経て直立二足歩行、長い進化を経て手が解放されたわけです。単純ではないとしても成長発達の過程でも基本的には同じ。少なくとも獲得した構造はしっかり形成しよう。これがセガンの着想です。ヒトと類人猿との積極的な検討がなされたのはT・H・ハクスレイ『自然界における人間の位置』（一八六三）が最初ですから、とてもはやいことになります。一八三〇年代は恐竜化石の全盛時代でした。私はパリにいたとき、古生物博物館に行ったことがありますが、当時の収集力のすばらしさに驚かされました。サルペトリエール精神病院から一五分程度のところにあります。セガンはそうした化石から時代を肌で感じていたに違いありません。

では、胸を張って歩ける力をどう育てるか。次回はその指導プログラムについてお話しましょう。

（北海道教育大学助教授）

### A　ヒトと類人猿との違い

（気道の形と長さの比較）



a　ヒト　　b　類人猿　　c　ヒト幼児

### B　進化論年譜

| | |
|---|---|
| 1753年 | ビュフォン『博物誌』 |
| 1809年 | ラマルク『動物哲学』（用不用説） |
| 1822年 | 恐竜イグアノドンの歯発見 |
| 1841年 | 恐竜の時代を中生代と命名 |
| 1856年 | ネアンデルタール人骨発掘 |
| 1859年 | ダーウイン『種の起源』（自然淘汰説） |
| 1863年 | ハクスレイ『自然界における人間の位置』 |
| 1868年 | クロマニヨン人骨の発掘 |